

- 67) B. A. Rogers and K. O. Stamm: A. I. M. E. Metals Technology 6 (1939) T. P. 1133
- 68) L. C. Chang and G. Derge: A. I. M. E. Metals Technology (1946) T. P. 2101
- 69) 大中: 鐵と鋼 30 (1944) No. 3, 34 (1948) No. 12, 36 (1950) No. 4
- 70) 松下, 森, 山本: 鐵と鋼 37 (1951) 561
- (註)
- 1)  $V_p = \text{CaO}/(\text{SiO}_2 + \text{P}_2\text{O}_5)$ ,  $V = \text{CaO}/\text{SiO}_2$  以下同様
- 2) 過剰鹽基の計算は次のようにして行つてゐる。  
鹽基としてはCaO, MgOをとり, これらは $2\text{RO} \cdot \text{SiO}_2$ の形で $\text{SiO}_2$ と結合するものとし, 又 $\text{P}_2\text{O}_5$ は $4\text{RO} \cdot \text{P}_2\text{O}_5$ として鹽基と結合するものとした。
- 3)  $\text{SiO}_2$ は $2\text{CaO} \cdot \text{SiO}_2$ の形で結合しているものとみなして次式によつて計算した。  
過剰ライム =  $\text{CaO} - 1.85 \text{SiO}_2$
- 4) 1943年4月30日制定 文献(1)参照
- 5)  $\text{SiO}_2$ ,  $\text{Al}_2\text{O}_3$ ,  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ を酸, CaO, MgO, FeO, MnO, CaS,  $\text{CaF}_2$ を鹽基とみなし, これらは $\text{MgO} \cdot \text{SiO}_2$ ,  $\text{CaO} \cdot \text{SiO}_2$ の如き bisilicateを形成して中性滓となるものと假定した。先づ過剰鹽基の値を計算し, 次にスラグ中の全鹽基の中に於けるCaOの百分率(%)を算出して, この値を過剰鹽基に乗じて過剰ライムの値とした。尙計算はすべてモルによつてゐる。
- 6) 遊離ライムの計算は便宜上重量%を用いて次式によつてゐる。  
 $0.01 (\text{CaO}\% - 0.93 \text{SiO}_2\% - 1.18 \text{P}_2\text{O}_5\%)$
- 7) 分光分析用 Grade SP-1 National Carbon Co., Cleveland Ohio
- 8) 通常同一試料につき3本作製し, 3回露出, その平均値を採つてゐる。
- 9) 1/8in. 程度の粗粒では誤差が大きかつた。

## 抄録募集

抄録原稿の手持が手薄となりましたので奮つて御寄稿下さい。(薄謝進呈)

執筆要領は毎號掲載の抄録欄を参照して頂き, 一題につき原稿用紙3枚程度に明瞭にお書き願います。

尙原稿用紙は400字詰のものを御使用願います。協會の所定の原稿用紙がありますので, 御請求次第お頒ち致します(一冊30枚綴30圓)。